

## 源氏物語の短篇手法について

—第一部における三つの予言を中心に—

武 原 弘

(一)  
源氏物語の成立に関する研究史は既に古い。多大の研究が、今日、貴重な成果をあげながら、いつも新たな問題を提起してきていることも周知のとおりである。

源氏物語の研究史に関する研究も、先学の諸先生によってなされてきているが、特に成立論に関するものでは、稻賀敬二先生の「源氏物語成立論の輪廓」(創元社「源氏物語講座」3冊・28)が詳しい。私は、詳細について成立論史を跡づける余裕をもたないので、今は右書に頼ることもなるが、私なりに一通り成立論を調査してみても、この貴重な研究課題は、源氏物語研究においては避くべからざる課題であることを思う。同時に、この課題も、作品外の資料がほぼ出尽くした現今、もう一度、作品そのものに還っていかなくてはならないことも痛感した。なぜなら、問題の発端はあくまで作品の内部にあるからである。何といっても、源氏物語の構成それ自体に問題がある。

源氏物語の構成(構造)上の最も著しい問題性は、稻賀先生の言われる通り「長篇源氏物語の中に混在する短篇性という、構造力の弱さ」(注④)であろう。源氏物語は、長篇として書かれたもの

か。短篇として書かれたものか。池田亀鑑氏によると、「源氏物語は長篇小説である」そうして「はじめて正しい理解」はなされるということだが(注⑤)∨、一方では、玉上琢弥氏のように「『源氏物語』は元來短篇を積み重ねたものである」(注⑥)∨と説く方もあり、両説ともに多くの支持を得ている。事実、源氏物語から短篇的な要素を指摘することは容易であり、先の池田氏の説において、「小説」という用語が用いられている点にも問題がある。なぜなら、物語と小説とは、いうまでもなく根本がちがっている。「物語を物語として見る」ことの重要さは、秋山虔氏も力説しておられるところである(注④)∨。

物語を物語として見るということは、源氏物語を正しく見るという点から確かに大切なことなのである。それは、近代小説研究における合理性とは別種の、対象を正確に把握する新しい合理性を要請してくるのであって、私は、ここで、玉上琢弥氏が力説される「物語の手法」の研究を、大いに推進すべきかと考える。私が、この小説で試みるのも、そうした物語独特の手法の探究であり、手法の問題が源氏物語成立の問題と密接して行くことを再確認してゆくものである。元來、構成論と構想論は、同じ帰結点に到るべきものである。しかし、源氏物語において、構想を論ずることは、容易な事ではな

源氏物語の短篇手法について

い。勢い、構成論で律してしまふ。この誤認をさげながら、源氏物語が執筆されつあつた状況を、あくまで科学的に探究しなくてはならない。源氏物語の手法の研究は、こうした構想論の中で、確かに貴重な研究領域である。源氏物語成立過程の研究の予備的考察として、私は、源氏物語の手法の研究を試みたい。特に、第一部における短篇手法について考察する。第一部における長篇的な要素と見られている予言や予告の描写について、その手法が短篇物語手法であるとは、いささか見当はずれのようにも受けとられようが、私の試みのねらいはこれである。

(一)

まずはじめに、源氏物語第一部の構造について概略ふれておきたい。所謂第一部三十三巻は、よく言われるように、はなはだ特異な構造を有している。桐壺巻をはじめとする十七巻(所謂紫上系諸巻)は、この物語の本筋をなすものとして相互に関連し、長篇化の構想を顕著に示している。一方、帚木巻をはじめとする十六巻(所謂玉鬘系諸巻)は、前記の長篇とはやや離れ、殆ど独立して各々短篇をなし、前記十七巻とは無関係にその間四個所に挿入された形となっている。この二系列の巻々を、前者長篇系とし、後者短篇系として理解することは、きわめて一般的であるともいえよう。勿論、これに対しては批判的な学説も多い(入注⑤)△。が、物語の梗概の上からは勿論のこと、登場人物の出入状況や、筆致、さらには思想や人間像について、第一部の構造を右の二系列に截然と分け得ることは、今日ではもはや否定さるべくもない。

そこで、何故にかかる奇異な構造を有するのかという原因についての究明がなされているわけだが、ほぼ二様の方法が試みられているようである。その一は、源氏物語はどの巻から書き始められたかという研究、他の一は、紫上系成立後玉鬘系諸巻が加筆挿入されたのではないかという研究などである。前者については言えば、これにはさらに三説が提起されている。(1)須磨起筆説(河海抄による)、(2)帚木巻起筆説、(3)若紫起筆説がそれである。(1)については今日あまり問題にされないが、(2)は玉上琢弥氏三谷栄一氏山岸徳平氏らによって、(3)は池田龜鑑氏阿部秋生氏らによって、それぞれ主張されている。これらの諸説を今詳しく検討する余裕はないが、桐壺巻起筆説を批判するこれらの学説では、源氏物語はその執筆当初においては長篇構想の物語でなかつたことになる。何故なら、源氏物語の本筋の緒巻たる桐壺巻に、光源氏の出生のことが描かれ、さらに、源氏が今後迎らねばならない未来の運命が予言されているからである。阿部秋生氏が言われるように「桐壺十七帖は、桐壺に語られている高麗の相人の予言を主とし、若紫・澁標の夢占いや陰陽師の予言をその補助的要素として、光源氏の運命の展開を語る物語」(入注⑥)△であるとするれば、桐壺巻が起筆の巻でないという考えは一つの矛盾に到るものであろう。桐壺巻後記説は、源氏物語第一部における長篇構想と短篇手法の問題究明において、重大な支障とならう。

一方、玉鬘系後記補入説は武田宗俊氏によって主張されている。武田氏はこの説によって、第一部の特異な構造の理由は明快に説明され、何ら矛盾を残す所はないと言われるが(入注⑦)△、たとえ後記補入が行なわれたとしても、なぜ現存の形の巻序のような構成に補

入されたかの理由について、説明されていない。武田氏はその理由を一応述べられてはいるが、△注⑧、△注⑨、未だ推測の域を脱し得ておらず、説得力に欠けている。

これらの点は、源氏物語成立論の中心論点である。私は、これらの論点をたえず心に置き留めつつ、私の問題に入ってゆきたい。私の問題は、物語の手法という点から、源氏物語の構想を明らかにしてゆきたいということなのである。

(三)

既述の通り、源氏物語第一部は、構造上、まことに奇異といわねばならないものである。相異なる二系統の物語群が、一つの作品の中に混在しているからである。池田龜鑑氏もこのことは認められ、「われわれは、これら三十三帖の物語の展開には、構想上、単純な長篇小説の発展とは思はれないもの、すくなくとも二つの大きな系列のもとに混淆したものであることをみとめようと思ふ。すなわち、それは長篇小説的系列と短篇小説的系列とであり、この二つのもの対立と調和との、矛盾した二要求のたたかひである。」△注⑩、△注⑪と述べられる。右にいう長篇小説的系列とは、いうまでもなく所謂紫上系諸巻のことであり、短篇小説的系列とは所謂玉鬘系諸巻のことであろう。

そして、前掲の阿部秋生氏の説のように、第一部の構想の特質が、桐壺巻の相人の予言や若紫・深標両巻の夢占いや予言を中軸とする古代伝承物語構想 △注⑫、△注⑬ にあるとするならば、これら三つの予言や夢占いは、第一部の構想の上からも、きわめて重要なもの

源氏物語の短篇手法について

といわなくてはならない。

阿部秋生氏によると、さらに、古代伝承の場合、物語の中に予言とその実現という発想形式は一般的であり、竹取物語や宇津保物語にもその例はみられる。予言は、必ず実現されなければならないという運命的な威力を発揮する。「物語の話の筋の大綱は、殆どその冒頭の部分を書いている時、既に作者の頭の中にあり、その定められた線にそって語られてゆく物語であること、又そこに登場する人物は、この大綱に沿って動いてゆくように運命づけられているのであって、登場人物の意志や感情や才能の動きが物語を展開し、話の大綱を決定するものになっているのではない。」△注⑭、△注⑮ ことなど、源氏物語の第一部の特徴であり、これはまぎれもなく古代伝承物語の型式だと説いておられる。他の点でも、この第一部の物語に古代伝承物語の型を認めることは容易である。△注⑯。

かくて、源氏物語第一部の主題と構想の中心は、桐壺巻の予言に支配される源氏の運命という点にしばられる。今井源衛氏も「第一部内部における宿世の思想は、主として、予言とその適中という形であらわれる。」△注⑰、△注⑱ と述べられ、秋山虔氏も「第一部は、この世で考えうるもつとも博大な愛情と、最高の富と名譽を体現するものとして光源氏の人生の完結を語っているが、周知のようにそのような人生は、まず「桐壺」における高麗の相人の口を藉りた予言にはやくも示唆されている。」△注⑲、△注⑳ と、この予言の威力の強さを説かれる。

第一部を、このような古代伝承物語の型の支配下にあつて、その予言を中軸とする構想を型どおり守っているものだとする見方は、

ほぼ一致した見解であろう。手塚昇氏も「予言の通りに事が運んでいくことは、一種の文学上の約束」(注⑩)と言われる。

第一部における予言や夢占いが占める比重は、それが長篇源氏物語の構想の骨子を成すが故に、またいっそう大きいといわなくてはならない。阿部秋生氏は、第一部の梗概を短かい要約で述べようとするれば、結局にして三つの予言(夢占い)を中心にまとめることにならざるを得ないといわれている(注⑩)。

ところが、前述の通り、桐壺後記説があり、今日この研究は高く評価されつつある。加えて玉上琢弥氏の音読論が提唱され、源氏物語に短篇的な要素を認めることも一般的になってきた。源氏物語は「短篇から出発し、長篇として統一された」(仲田庸幸氏)物語であるという点は、多くの学者が共通に認めているところである。

短篇から出発し、長篇として統一されたということ、予言を中軸として桐壺巻から執筆されたということは、明らかに矛盾を残している。現今、源氏物語構想論の中で、この点は存外あいまいにされているのではないだろうか。古代伝承物語型式に準じて、第一部の予言の重みを理解することが不当とは思わない。しかし、このことは、源氏物語の作者が執筆当初の構想において、桐壺巻から藤裏葉までも予想していたというふうには、必ずしもならない。源氏物語における予言の描写は、単純に長篇化のための伏線だと断定することはできない。むしろ、その予言や夢占いの描写は、それぞれの場合における具体的な諸条件にひかれて、著しく場面的であったり、あるいは逆に説明的である。私は、問題になる三つの予言(予告)を、ここで再吟味してみたい。部分にひかれすぎた解釈法にな

るかも知れないが、構想論の多くは、こうした細い手法の論を見おとしがちなのではないであろうかとも思うので……。

#### 四

桐壺巻において、高麗の相人が光源氏の相を次のように占っている。

人の親となりて、帝王の、上なき位にのぼるべき相おはしますためとなりて、天の下助くる方にて見れば、又、その相たがふべし。」(桐壺巻、山岸徳平校註「源氏物語」岩波文庫による。

以下同じ)

これは、指摘されるとおり、光源氏の未来の運命を予言したもので、物語において、この予言は後々の巻まで響いている。やがて源氏が摂政の位をすすめられながらもそれを辞退し(濡標巻)、太上天皇の位に準ぜられるに至って(藤裏葉巻)、一族栄華の大団円となるが、右は、そのことをいち早く暗示しているものである。「乱れ變ふること」とは、通説(「花鳥余情」以下の注釈書)では、源氏の須磨流謫事件をさし、「朝廷のかため」とは、摂政関白をさしているときとされている。しかし、「乱れ變ふること」は、源氏一身上の乱れではなく天下国家の動乱だという説もあるし、「朝廷のかため」についても、源氏が後の巻で摂政になったとみる説やその否定説もあり、最近では、阿部秋生氏や手塚昇氏によって、精密な考証がなされている。

物語における予言は、必ず実現されねばならぬ拘束力をもってい

たとか。光源氏のそれ以後の生涯に、この予言が陰然として影をおとしていたことは、確かにその通りである。しかし、今、この予言が実現されたという事実を前後照合によつて指摘することができたとしても、そのことは、源氏物語の構想論にどれだけの発言をなし得るのであるか。つまり、この予言は、長篇物語の構想の大綱としてその価値を認められると同時に、その場面において果す機能をも認められなくてはならない。何故なら、単に未来を先づけるものとして以上に、この予言は、この場面で叙せられて少しも不自然でない、より必然的な具体性をもつて、読者には読みとられるからである。極言すれば、この予言は、一面で予言としての暗示的な描写でありながら、他の一面でそこに至るまでの叙述ないしはその直後の描写に渾然と密着したものである。例えば、「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人」という表現は、われ

われ読者にとつて格別予言的なものではない。何故なら、読者は源氏が皇子であり帝王の御寵愛を一身に受けていることを知っているからである。が、相人はそのことを知らない。「御後見だちて仕まつる右大弁の子」と見せかけてあり、相人にとつては、かかる相が占えたことが自分にも不思議なほどである。「相人、おどろきて、あまたたび傾きあやしむ」とはこの事情によるのである。さすがに「賢き相人」らしく、見事その若子の素姓を見破った。かくばかりすぐれた高麗人の相人の言なればこそ、帝は安心してそれに従うことができる。……………

かくして、この予言の叙述は、予言としての機能を有しているには違いないが、この場面での相人の偉力を効果的に表現しようとした叙述とも受けとれる。と同時に、その前後の描写の中で読めば、

#### 源氏物語の短篇手法について

結局それは、桐壺帝の動揺する心理、その心理描写を背景として浮き彫りにしようとする光源氏の比類なき卓越性を強調するための文学的趣向なのである。即ち、相人の言葉の前半は、それに先行する帝の不安定な心理状態——源氏を、第一皇子をさしおいて立坊させたいが、弘徽殿をはじめとして世間の非難があるだろうというジレンマーに決断を下せしめ、その言葉の後半は、臣下としての源氏の相がないということによつて、御相の確かさが示される。

結局、ここでは、光源氏は皇子でありながらも第一皇子の勢力圏より受ける圧迫のため、そのまま安泰ではなく（弘徽殿女御一派と桐壺更衣との対立反目という構想は、桐壺巻の重要なモチーフである。）さりとて類稀な秀逸せる人物として臣下に甘んじる人物でもなく、いったいこれは如何なる運命を辿る人物なりやというふうな、主人公の前途を大きな謎と魅力で飾った不定疑問の描写なのである。そのような意味で、この相人の予言は、未来へ物語を動かそうとする要因と、主人公の過去から必然的に要求される要因と、両面をもつて描かれており、物語の手法としては、後者により深い関連を有してくるものと考えなくてはならない。

読者には了解すみの事柄でも登場人物には不明の事として描かれることがあり、またその廻の描かれ方もある。作者のこの間の表現技術を私は「手法」と考えている。

第二の夢占いの描写について考察してみよう。若紫巻に、次の表現がみられる。

中将の君も、おどろおどろしう、さま異なる夢を見給ひて、合はするもの召して、とはせ給へば、およびなう、思しもかけぬすちの事を、合はせけり。「その中に、違ひ目ありて、つつし

ませ給ふべきことなむ侍る」といふに、わづらはしく思えて、  
「身づからの夢にはあらず、人の御ことを語るなり。この夢合  
ふまで、又、人にまねぶな」と、のたまひて、心の中には、「い  
かなる事ならむ」と、おぼし渡るに、この女官の御事聞き給ひ  
て、「もし、さるやうもや」と、おぼし合はせ給ふに、……  
(以下略)……

右のうち、予言としての夢告げは、「およびなう、思しもかけぬ  
すぢの事」と「その中に、違ひ目ありて、つつしませ給ふべきこと  
」の二つである。前者がいったい如何なる内容を言つたものか、推  
測すれば、源氏が帝王の父となるべしという事(山岸徳平氏)であ  
らう。後者の部分について、「その中」の「そ」が、いろいろ解釈  
されうが、やはり、夢解きで解き合わせた通りの幸運を指してい  
る(松尾隠氏)と考えるのが自然であらう。また、「違ひ目」は  
「行きちがい」の意で、文脈上「つつしませ給ふべきこと」と、内  
容上同一事件をさしていると解してよからう。

この部分は、「源氏物語評釈」で萩原広道が述べた如く、「此  
の夢の占に、源氏生涯の禍福の伏案を立てられたること、かの桐壺  
の相人の詞と同じき中に、ここはやや委しくなりたり。末の巻に照  
してよく味はふべし。」<sup>1)</sup>確かに注意されるべき個所である。そし  
て、ここが、光源氏の須磨流謫事件を予言しているの通説  
である。

夢が未来を暗示する力をもつ神秘的なものであるとは、当時一般  
的に信じられていたことである。それだけに、文学においても、夢  
告げや夢合わせを扱うことも多く、例えば、「宇津保物語」の俊蔭

巻に、仲忠の生涯の際はし鷹の夢を見た娘が孝行の子の生まれる前  
兆だと言っている。他に「伊勢物語」をはじめ「蜻蛉日記」や「更  
級日記」に、夢の告げを描いた条は多くみられる。源氏物語の中  
でも、夢の描写は多い。いま、試みに「夢」という語の用例数をみ  
ると、源氏物語に一三三例を数える(△注⑩▽)。そのうち、夢告げ  
ないしは夢合わせを描く場面は十一例ある(但し、明石巻で明石入  
道が源氏を迎えに來る場面のような、夢にある暗示や予告をみた  
というような場合をすべて数えた)。源氏物語の作者も夢告げの信仰  
をもっていたであらう。

ところで、この夢告げの場面について、私はつぎの四つの点を考  
察した上で、従来の解釈に多少の補正を加えたいと思う。

まず第一に、源氏物語における夢告げの場面では、殆んどの場  
合、その夢はそれほど遠い未来について予告するものとしては描か  
れておらず、近い将来において実現されている。また、実現後にお  
いて夢告げのことが叙せられることも多い。一例を挙げれば、明石  
巻において居眠りをしている源氏は夢を見る。その夢に故院が現わ  
れ、「など、かくあやしき所にはものするぞ」と語りかけ、「住吉  
の神の導き給ふままだ、はや舟出して、この浦を去りぬ」と告げ  
る。手法としては、いうまでもなく予告である。が、この予告が実  
現するのは、その夢告の叙述を置いてそう離れてはいない。数行を  
隔てて後、明石入道が、やはり夢告げに誘われるまま、源氏を迎え  
にやってくる場面が描かれている。他の例においても同様である。  
若紫巻のこの夢告げが、遠く須磨巻での事件を予言しているのだと  
すれば、これは例外といわねばならなくなる。

第二の点は、夢告げの描写は、すでに事実となって生じている事柄について、後から、実は夢告げがあつてその事は予知していたのだ、という形でなされる場合もあるということである。例えば、若菜上巻に、明石入道より明石上へ送られた消息文の中に、次の叙述がある。

わがおもと、生まれ給はんとせし、その年の二月の、その夜の夢に見しやう「身づから、須弥の山を、右の手に捧げたり。山の左右より、月日の光さやかにさし出でて、世を照らす。身づからは山の下のかげに隠れて、その光にあたらず、山をば、広き海に浮べおきて、小さき舟に乗りて、西の方をさして漕ぎゆく」となん、見侍りし」

知られる通り、これは明石中宮と春宮の誕生の予告であるが、この叙述は、事実が起つた（明石巻）後になつてゐる。だから逆に、明石巻が書かれる時は、若菜上巻の内容もほぼ構想されていたのだとする見解もあるようだが、夢告げの描写を中心に考察する場合、このような書き方は、もはや予言とは言えないものである。若菜巻のこの夢合せの条が、このような例に入らないとは限られないであろう。源氏物語の作者は、しばしばこのような筆法を用いてゐる。前に書いたことを、後の巻において発展的に描く場合、あとから諸人物や諸事件の関連づけを施そうとすることは、ありうることである。従つて、自然に関連づけが果されえないような時には、運命の微妙さきせしめ、因果の理の不可思議さを思わせることになるがそのような時、夢は重宝な媒材となるだろう。また、夢は、当時の人々の人生観そのものの根本に深く入りこんでいたであらう。しか

#### 源氏物語の短篇手法について

し、人物や事件の相互において、前巻と後巻との間に関連や結合がみられるからとて、単純に、前巻において後巻まで構想されて書かれた、ということにはならない。要するに、関連づけという分析作業と構想研究とは、必ずしも同質の研究作業ではないのである。

第三の点は、夢告げが事実として実現してくる場合、源氏物語では必ずといっていいほど、夢の告げがあつたということが後の叙述のどこかに明記されているが、源氏が須磨へ引退する条の後において、そのことがかつて誰かの「夢に告げられていた」という叙述はどこにもない。

第四の点は、この夢告げの叙述文の解釈に関わることで、再検討したい点がいくつもある。その(1)は、源氏が「わづらはしく思えて」「いかなる事ならむ」と考え続けたというのは、何についてなのかという点で、通説ではその点が明瞭でないが、文脈から考えて、「その中に、違ひ目ありて、つつしませ給ふべきこと」があるという相人の詞にちがいない。そうだとすれば、「おぼし渡るに、この女宮の御事聞き給ひて、『もし、さるやうもや』とおぼし合はせ給ふに」（傍点稿者）という呼応の叙述は、前の「いかなる事ならむ」という疑問が氷解してきた心理状態の描写であるから、「違ひ目」を須磨巻における源氏流謫事件と解することが不合理となつてくる。私見によれば、「違ひ目」であり「つつしませ給ふべきこと」、源氏にとつて「いかなる事ならむ」と気がかりな事とは、藤壺懐妊のことである。故にこそ、「この女宮の御事聞き給ひて」「おぼし合はせ給ふ」うたのである。

その(2)に、この条のはじめ「中将の君も」とある「も」をどう解

釈するか。いうまでもなく「も」は並列を示す係助詞である。先行の叙述において、妊娠したことを知った藤壺自身の懊惱が描かれる。「『いかなるにか』と、人知れずおぼす事もありければ、心憂く『いかならん』とのみ、おぼし乱る」とある。「空おそろしう、物を思す事ひまなし」とある。こういう藤壺の姿を描いて、ただ一人の残る相手を描かないわけにはいかない。源氏の方でも……という書きぶりは、ごく自然である。かくして、この条は、藤壺の内心の不安と煩憫を前者とし、源氏の不吉な夢占いによる不安と煩憫を後者とし、両者あい応じて一段を完結している。「中将の君も」の「も」は、従つて、単に「さまざま異なる夢を見給ひて」に係るのみではなく、「わづらはしく思えて」にも「いかなる事ならむとおぼし渡るに」にも、とりわけ「もし、さるやうもやと、おぼし合わせ給ふに」にも、係っているのである。

以上の四点から、私は、この夢占いにおける「違ひ目ありて、つしませ給ふべきことなむ侍る」という詞を、單純に、須磨・明石兩卷の伏線だとは解さない。少くとも、ここですでに須磨・明石卷の構想が成つていたとは解していない。ここでの描写の中心点は、藤壺懷妊ということなのである。夢解きをする人も、具体的にこの事実を知っているはずがない。藤壺と源氏との、二人だけの秘密である。それどころか、源氏自身にもこの懷妊がわかりきつてゐるわけではないから、夢解きも源氏も最初は「謎」に包まれているのであるが、藤壺懷妊の事を知らされ、源氏には、思い当る節があつたのである。この間の心理上の起伏を、この夢告げはいっそう効果的に表現するためにあつたのである。

無論、この藤壺事件が因となつて源氏の須磨引退事件が起つて來ることではあつた。源氏の須磨引退の原因については、古來、諸説がたたかわされているが〔注⑩〕、この藤壺事件と密接な関連があることは疑えない。しかし、前にも述べたように、それは、作者が後から関連つけたという性質のものであつて、この巻において、須磨卷までを構想したものではないという気がする。

要するに、この夢占いの叙述さえも、この場面の形象（文芸的効果）という点に力点をおいて見られるべきで、短篇物語の手法の中て読みとることが肝要であらうと思ふ。

次に、第三番目の予言とは、濡標卷の、つぎの叙述である。

宿曜に、「御子三人。帝・后、かならず、並びて生れ給ふべし。中の劣りは、太政大臣にて、位をきはむべし」と考え申したりし、『中の劣り腹に、女は、出で來給ふべし』とありしこと、さして、かなふなめり。」

右のうち「帝」とは、冷泉帝のことであり、「后」とは明石中宮のことであり、「中の劣り」とは夕霧のことである。

注意したいことは、宿曜占いによつて、過去において相人が占つていた（過去を示す助道詞「し」によつてわかる）という事実を述べてはいるが、源氏物語に、これに當る叙述はどこにもない。さらに、冷泉帝の御即位の事は既に同卷の初めに叙述されており、夕霧については、後の巻においても左大臣以上には叙位されておらず（宿末卷）、予言というにはふさわしくないものである。實質上、内容が予言であつたにしろ、物語の展開のし方・手法の上からみる

と、予言の機能は果し得ていないといえよう。わずかに、誕生したばかりの明石姫君の未来を「后」と予言した点が残るばかりである。事実、この条は、明石姫君の誕生を主たる物語としているところであり、この姫君一人の予言であつて十分なのかも知れない。だとすれば、やはり、予言とはいえ、その描写手法は、きわめて場面に制約されているものといふことができよう。その直後に「相人のこと、空しからず」と、源氏が感歎しているが、読者にとつて、明白となつてゐる過去を、思わせぶりの相人の予言として描きあらわそうとしているのは、予告の機能を失つたものといえよう。

作者と読者の關係を意識した上での作者の描き方（手法とはそういう意味だが）を考察する限り、右の予言や夢告げの描写は、さほど予言的ではない。

さて、このように述べてくると、私は、源氏物語第一部における予言や予告（そして本稿では触れなかつたが遺言もこれを含めて考えられる）を、少しく過少に評価したきらいがあるかも知れない。ただ、私は、源氏物語の中の予言や予告が、第一部の長篇物語の構想上の骨子であるとは考えていないことを述べたのである。予言は確かに適中している。その味で、前述の阿部秋生氏や手塚昇氏のお説も肯ける。が、予言が適中した、という描き方は、構想上の伏線の形象化ということと、同じことではない。源氏物語における数々の夢告げや予言は、あくまで伏線ではなくて、そういうものに支配されている人間の生き方の問題、いいかえれば、源氏物語の人物像、思想の問題につながるのである。従つて、この予言の描写を、源氏物語の長篇の構想と直結することは、妥当ではない。構想

の問題を探究するという観点に立てば、予言の描写も、手法上の問題とせねばならず、そうする時は、やはり長篇化の骨子というよりは、短篇手法としての場面に、それはより強い連関を有していると思ふのである。少くも、予言が描かれるとき、それがそこで描かれなければならない必然性は、その場面の中にある。物語というものは、そういう書き方がなされるのではないだろうか。

(四)

源氏物語が、その基調に、短篇物語の性格を強くもつてゐることは、いろいろな点から立証されると思う。例えば、物語中に和歌が多く挿入されている事実もそうだし（歌物語の性格も多分に影響していると思われる）、登場人物、ことは主人公光源氏が統一性のある人格として描かれておらず、巻々によつて様々に分裂した人格となつてしまつてゐることも挙げられよう（注⑩）。何よりも各巻々が相互に有機的の関連をもつていないことはその端的な徴しである。源氏物語における長篇性と短篇性とのいずれに力点を讀むかということとは、この物語のテーマ、執筆の動機などにもからむ重要な問題だと思ふ。故に、時代と作品と作家について研究を続け、ありのままを究明しなくてはならない。今は紙数もつきてしまつた。次の機会に試みてみたい。

注⑩ 国文学解釈と鑑賞（昭、四〇、七）（源氏成立論史における

役割）

② 新講源氏物語（昭、三三、九、一〇）（解説）

③ 源氏物語研究（昭、四一、三、三〇）

- ④ 「源氏物語の世界」 (昭、三九、十二) (物語文学研究に  
ついての二、三の問題)
- ⑤ 岡一男氏「源氏物語の基礎的研究」(昭、二九、一)  
森岡常夫氏「源氏物語の研究」(昭、二三、十一)などが代  
表的。
- ⑥ 国文学解釈と鑑賞 (昭、三八、八) (源氏物語の構造とその  
人間像)
- ⑦ ⑥に同じ (源氏物語の執筆順序と卷々に登場する人間像につ  
いて)
- ⑧ 文学 (昭二五、七) (源氏物語の最初の形態 (下))
- ⑨ ②に同じ
- ⑩ 「源氏物語研究序説」 (昭、三四、一)
- ⑪ ⑥に同じ
- ⑫ 登場人物が美丈夫、勇士、美女、節婦であること、卷々の冒  
頭文、主人公の流離 (貴種流離譚) など、古代伝承物語の型
- ⑬ 日本文学史 (岩波講座) 源氏物語 (昭、三三、八)
- ⑭ 国文学 (昭、四一、六) (源氏物語の構想第一部)
- ⑮ 「源氏物語の再検討」 (昭、四一、一)
- ⑯ ⑩に同じ
- ⑰ 吉沢義則著「対校源氏物語新釈」索引による
- ⑱ 多屋頼俊著「源氏物語の思想」(昭、二七、四)や仲田庸幸  
著「源氏物語の文芸的研究」(昭、三七、九)など参照
- ⑲ 和辻哲朗氏「源氏物語について」(日本精神史研究 (大、  
一五))